

大山門の由来

栃木県立那須拓陽高等学校所蔵



昭和46年3月竣工

栃木県立那須拓陽高等学校

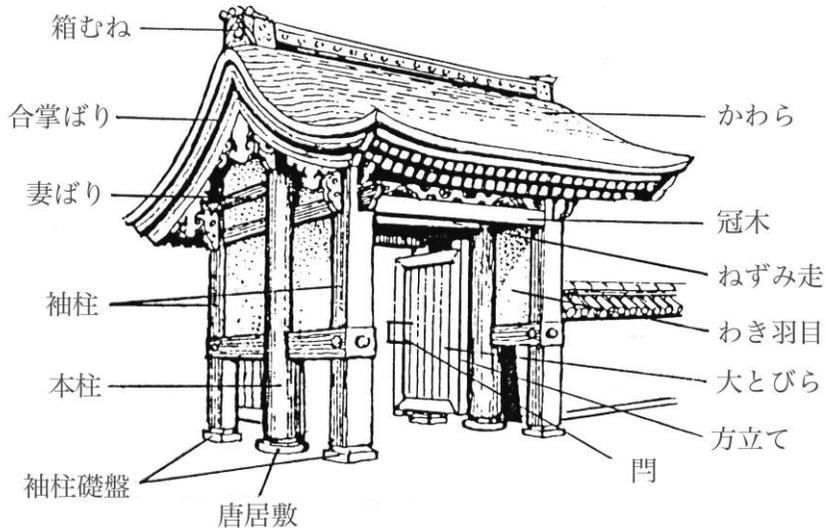
栃木県那須塩原市下永田4丁目3-52

電話 0287(36)1225

FAX 0287(36)8027

1. 大山門

四脚門（しきやくもん）ともいって本柱二本の前後に二本ずつ側柱を立て上部を梁でつなぎ平入の屋根をかけた門であり、側柱が四本あるのでこのように呼ばれています。これは、特に寺社に多く使われ、邸宅では身分の高い人の家に用いられていました。江戸時代になっては武家や名主の間に普及していました。



2. 大山門の歴史的背景

本校の大山門は、大山 巖元帥の次男の大山 柏氏が所有していたものです。芳賀郡市羽村の藤平謹一郎氏（現藤平光一氏の父親）宅の裏門として使用されていたものを、昭和初期に大山 柏氏が譲り受け鈴木助夫氏（鈴木利夫大山頭彰会々長の父）らが馬車敷台をもってこの地まで解体して運搬してきたものです。



大山 柏

陸軍少佐 従二位勲三等 文学博士 公爵

宿痾高じて昭和44年8月、80歳をもって不帰の客となる。町をあげてその霊を安かれと深い祈りを捧げた。

藤平氏宅は、芳賀郡市羽村赤羽に常時代官が執務していた陣屋あとでした。寄合衆蘆野氏が陣屋をここに設けたのは近世の初期であろうと推察できる。藤平氏所蔵文書によれば、「慶長年中、先祖藤平伊賀、西方より引越、下赤羽居住す云々」とあります。(栃木県郷土史散歩 落合書店刊)

しかし、建造年代については、全く不明です。伝承によると創建以来火災にあったこともないので、江戸時代初期のそのままの姿を保っていると考えられます。

この大山門は、蘆野領下の庄陣屋だった藤平氏宅裏門でこのように由緒あるものであり歴史の資料とするにあまりあるものです。

3. 大山門再建ならず

大山 柏氏は、萱葺きものを瓦葺きの屋根に改造して大山邸の門として使用するため納屋内に一時保存しておくことにしました。柏氏が太平洋戦争に出征する際“この争いが勝利に終わったときは凱旋門として建てる”との意思表示をされていたと言われてます。

しかしながら、この戦争は昭和20年8月15日敗戦を迎えることになりました。このことによってこの門を再建する機会を失い約30年の間納屋に保管したままとなっていました。

4. 大山 柏氏より本校へ寄贈

本校は、昭和20年開校いたしました。この当時は450名の生徒でした。しかし、昭和30年度以来本校への志望者が急増して、学級増により21学級1,100名となり現在の施設設備では効果的な教育が困難となり、地域農業振興と開発を推進する後継者育成のため農地の買収が必要となりました。昭和44年大山 柏氏との用地交渉を行いました。買収の大綱がかたまりかけた8月には大山 柏氏は肝臓炎にて急逝されてしまいました。その後遺族である大山武子夫人との再交渉が開始され、10月9日17ヘクタールの土地の売買契約を締結することとなりました。

5. 栃木県による買収

買収するこの契約による売り渡しの際、大山邸内の洋館・和館は無償寄付されました。更に大山門についても寄付されました。しかしこの門は、大山武子夫人により那須農業高校の生徒の通用門として校内に建設してほしいとの要望があり、学校側は承諾することとしました。

学校としては、大山 柏氏の本校に対する全面的な理解と好意により安値により学校農場に解放してくれた感謝と、大山門は近代的校舎の中に温故知新の意味からも生徒の通用門として使用し、生徒は朝夕この門をくぐって衿を正すことのできる徳育の面でも大いに意義があるものと考え、現在地に決定しました。総工費200万円とし、昭和45年12月に着工して46年3月に竣工することができました。

6. 市貝村市塙の小林眼科医宅の表門との説

小林家は江戸中期から当地区の名主を勤めた旧家です。屋敷は旧市貝町役場跡地一帯にありました。

市貝町の渡辺剣二氏（大正13年生）は、この小林家の直系で父毅郎の次男です。小林毅郎氏は東大医学部を卒業後眼科医を開業していました。しかし、毅郎氏は渡辺剣二氏が5才の時に病気で死去しました。剣二氏の話によると、大山門は剣二氏5才の時には黒塙と共にありました。昭和20年10月復員したときにはすでに売却されてなかった、と言っています。渡辺剣二氏の出征された年代が問題のカギになると思いますが、大山 柏氏は出征前に戦勝の際の凱旋門としたいなどと言っていることから同期であり、どちらとも言えません。どちらにしても由緒ある門であることには変わりはありません。